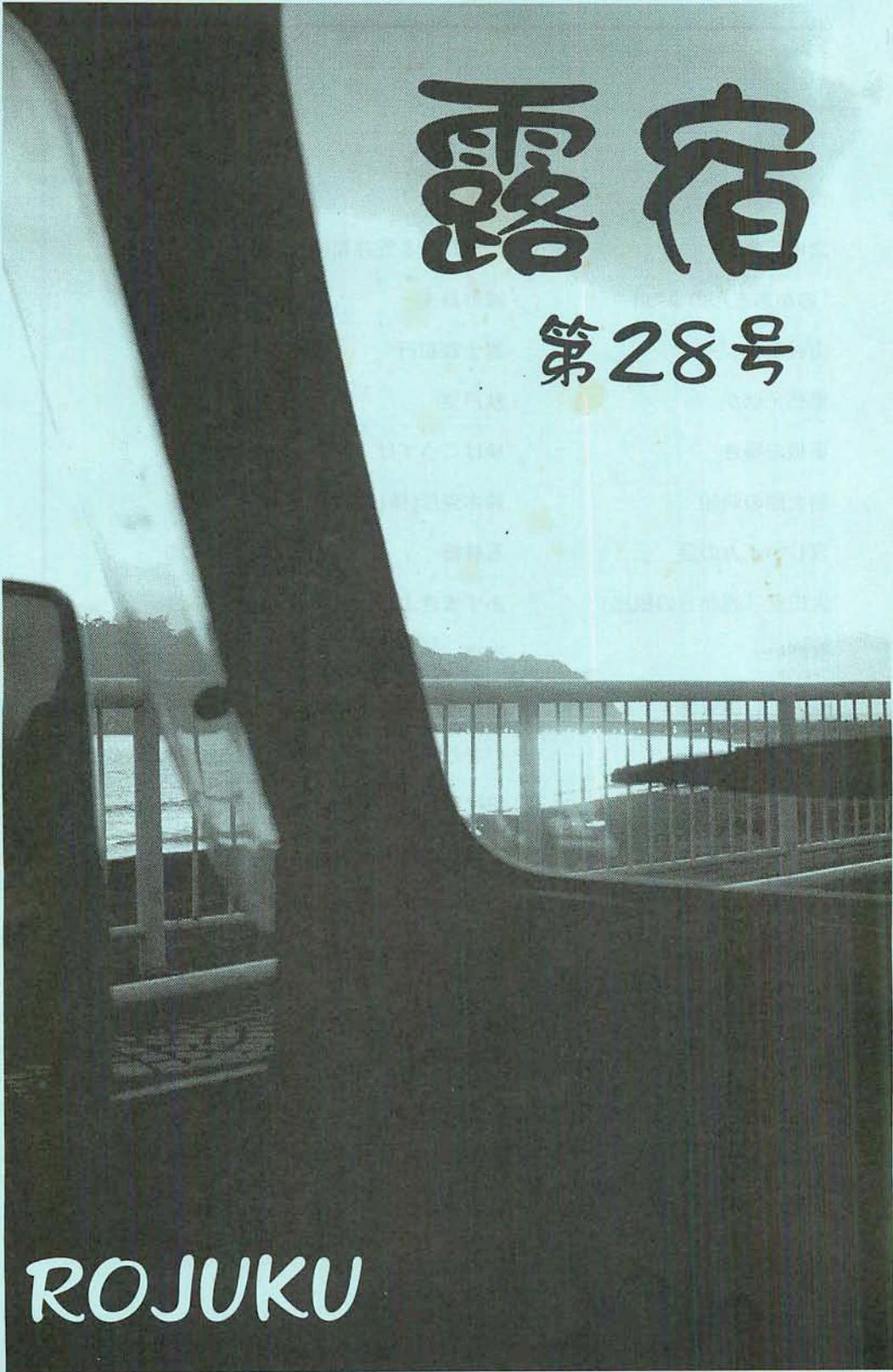


路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』

2004年1月1日発行

露宿

第28号

The cover features a black and white photograph of a view from a boat. A white railing is visible in the foreground, and the background shows a body of water and distant hills under a light sky. The title '露宿' and issue number '第28号' are printed in large, bold Japanese characters in the upper right. The word 'ROJUKU' is printed in white, bold, uppercase letters in the bottom left corner.

ROJUKU

露宿

目次

表紙写真	坂本浩康	
文中写真	岡田知子&笠井和明	
「おかあさんのうた」	城野昌夫	2
山谷エレジー	富士森和行	7
郷愁・ほか	秋戸空	9
垣根の囁き	ゆげこうすけ	14
朝太郎の箱船	鈴木克彦(挿し絵も)	15
哀しいイカの話	五林修	20
大田寮「死からの脱出」	あずまきよし	21
御願い	宗春	
歌集 亡国の旗	望月大成(挿し絵も)	23
ひとり言	いさむ	26
新しき年を迎えて…	田代猛	27
俺の血と夢・ほか	名無しの権平衛さん	
平成・前期・私的雑感	幻人・アル・カポネ	29
わが妄想・ほか	名無しの権平衛さん	30
今日一日	只野酔払	31
水道町より	高橋美香	36
あかい花	はり師いぬ丸	37
山谷の天使	名無しの権平衛さん	38
俳句	いわせまこと	
編集後記		

おたんじょうびによせて

でんぼうぶん
はちじゅうさんの
おたんじょうびを
ここからおよろこび
もうしあげます
ちちをよろしく

『おかちまち』にて

たかはしとしこさま

たかはしまさのりより

(母のお誕生日がこの一月十七日に

せまってきたのでおくることば)

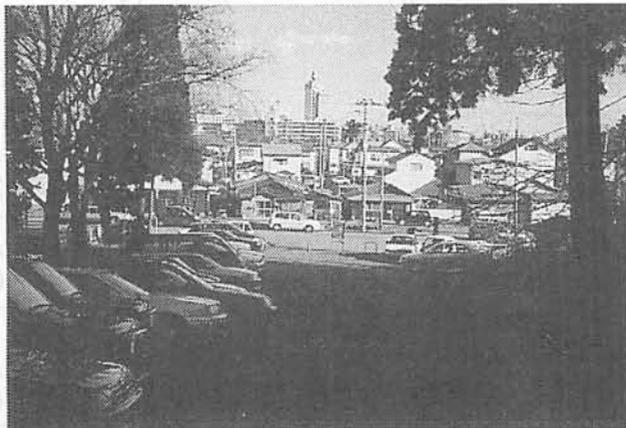
城野昌夫 詩集

(おかあさんのうた)

— わすれえぬ女は^{ひと}おかあさんひとり —

— 一九九五・九・一四より

— 一九九五・八・六まで —



母なる歌声によせて

（一九九五ふあみりーこんさーと）

つゆあけまじかと

ごっほのおいたちを学んだ

ゆうぐれ

脳下垂体が重く

まぶたの廻りも腫れ

羊水につかっているような

このごろ

（合唱ではいやされるならばこんな

かるい価値しかない）

そぶらののいみすら

わからないひとびとが

（夏は来ぬ）もあつたものではない

青い帽子はうなだれているのか



（ひとほうただけでは生きられない

ばんのみでもたりないくらいだ）

（絵で描けないうたであつたならば

ころざしを写すわけでもない）

たしかにうまいけれども感動がないと

ぶるじゃさろんの発声だ

野宿生活たびびとでありまして

響きわたる拍手が近づいている

—東京都港区虎の門一の二二

港区立青年館の4Fほーるにて—

一九九五・七・二〇（すい）くもり 一八..五〇

鮮光

暑い中どのようにお過ごしでしょうか。

小さい頃縁側におかれた西瓜を

五分分にきり

おかあさんの

あのなつかしい味が

都会のおあしすで思いうかべる

病弱だったわたくしを

べにしりん打ちにきつとゆききした

隧道もかわらないままだろう

母物に涙腺いたく

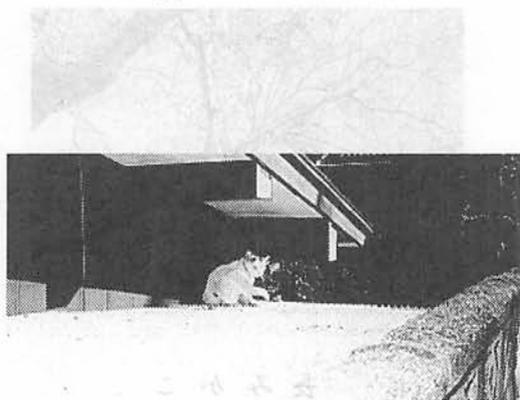
かいせない愛を

遅まき惜(せつ)なくなりませ

顔を合わせれば憎まれぐちたたいて

遠くで慕うをくりかえす

素直にお詫びができない



生して半世紀も

忘れえぬ女(ひと)はおかあさんひとり。

一九九五・七・二九 一四〇〇

▼おぼえがき▲

先日、神田神保町に行ったとき、ある友人より『おかあさんをたいせつに—』といわれましてから、以前、したためた詩作品の中より二篇自選し、今日ひらめた『鮮光』をふくめて三篇完稿し、あわせて五作品を集めまして、『あかあさんのうた』(仮称)の詩集を發行して、その友と母の思にささやかでもむくえればと思っています。

私の母もおとし八十一才。秋田県出身。私より横須賀市にくわしくなったことだろう。

母のうたをかくのは気はずかしい。

ばぶてすと（新生）

山また山の
信州のばんがろー
三泊四日のごくろうさま

帰りは観光ばぶが
TOKYOまで運んで
くださいます。
四十八年の夏を若いひとたちと
過しています

おかあさん
帽子をかぶらないと
しかってくださいました
それ以来わたくしは
ぼうしをいくつもなくしてしまい
泣いたものです

※ ※ ※



いざや・かずき・あゆみらの
おとうととよばれる牧師が

《とてもさん

ぼうしをかぶったほうがよい》と

いったのは
三日前の昼であった

※ ※ ※

こんちねんたるにゆられて
かっぱぎけを友と飲みかわし
みいてんぐしつ揺れ
長野道を走りゆく

おかあさん
のんだくれの息子を
ごめんなきい
神はいつも
いつくしみのまま
みまもっている。

—信州新町より新宿駅西口までのこんちねんたるばす

2011の後部座席にて—

一九九五・八・三（もく）はれ 一五〇〇〇

感 喜

早稲田の森の地下室は

開かれた扉がやすらぎを得て

国際人のめざめが湧きあがり

握り つながり 踊り いのりをします

おかあさん わたくしが

すみませんでしたと

素直な心持ちなれたから

お便りつづり送る

母乳を新生児にあたえる姿が

若い女生とおかあさんとが

まぶしくほのぼの情景が浸っていた

戦後まもない日貧しいが

おかあさんは糧を

わたくしに授けた ありがとう

—東京都新宿区西新宿二の三の一
日本ばぶてすと同盟東京平和教会の読書にて—
一九九五・八・六（にち）はれ 一七〇〇



— 山谷エレヂー —
一六首詠

富士森 和行

町挙げて美化にとりくむ姿勢見ゆ労働者らの汚染の原点

現在も玉姫の朝市変らねど就労の声途絶えて寂し

空に鳴る風の音聴へねど夕べ山谷の月わが過去映す

ひと間のドヤの夜更けて起稿する吾れにふさわし愚老の教よ

(10/9 山谷、黎明館にて)

不法滞在の外人増して物ものし「テロ」を身近に思ふ時ある

(10月末、清川旅館区域の検挙に遇ふ)

霜月の晴れた或る朝川浴ひに往けば路上に棲む家密集す

(白髭橋より綾瀬橋の果てまで)



母方の親達が且て貧しさと斗ひし場所橋場を歩ゆむ

われも亦人間関係の拙くてふり出しに戻る七十五年よ

朱に交はれど紅くならざるわれ故に今日も山谷の夕日に叛く

三の輪まで暗渠となりし山谷堀の緑道久しきすらひ行かむ

知的障害者ら乗り込むバスに居合せて彼等の会話に馴染てゆけり

失へる知性聊か還りたる顔みな聡明に見えて哀しき

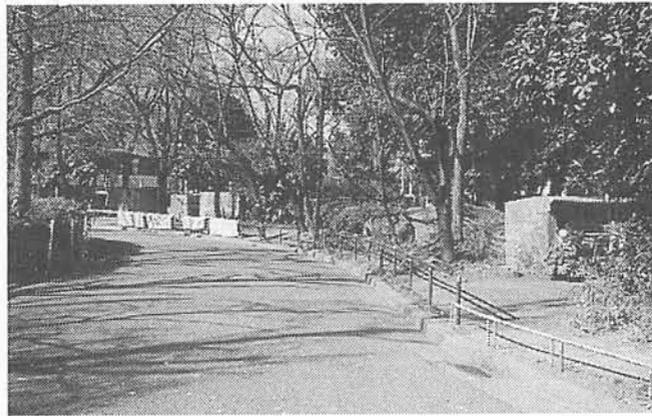
転々とわが放浪のたえまなき余生と云へぬ限界におり

山茶花の散り敷く道に浴ひ乍らわが郷愁の涙堪ふる

ひたむきに生きる高齢労働者らの受付相談に朝の光が射す

逞しき彼等の生きざま見習わむと佇むわれは光に背を向けて

(11/17 城北労働福祉センター分館前にて)



郷愁

93
7
3
秋
戸
空



ある時・突然・・・
雨が降って来た

だからといって

ここに・海が在るわけでも・・・

唯・・・

風の影とか

ここに・山が在る分けでも・・・

唯・・・

背の陰とかが

ポツネンとアスファルトに

染みを映す

陽射しの前の

降り続く雨

梅雨・・・

過ぎて去(い)った歲月

暑中の熱さが

脳裏のかたいに

媚びり・・・

張り付いていて

汗の・・・

滲むかぜが

居部屋・・・

の内を吹きぬけている

都市・・・

スッカラッポだし

季節・・・

も無くわたる風もまた

一人つきりだろう

異地に居る我が友よ

自然・・・

というものが

生きとし生ける者と

信ずるならば

私の住む都市には

まるで私を感動させ得る

自然というものが

何も！何も？

無いのです・・・

在るのは青くもないけれど

白く光っている空だけ
だけど・雨だけは

一人前に降ってくるんです。

私は・・・

明るい海の揺がりを

知らないのです

荒れた海の揺がりも

知らないのです

明るい山の深い揺がりを

知らないのです

荒れる山の奥深い揺がりも

知らないのです

故郷すらしらぬ・僕

かつての浅い儂い夢は

遠くえ去って(い・・・)しまったし

かつての深い影は

脳裏にまだとどまっています。

そして・・・

深い影は胸裡へと沈みこんで

浅い儂い夢は時間の

遠くへと去って行きました。

スッカラッポになって・・・
この私の内をよぎる
風の中にひそむ影
胸裡の中にひそむ儂い夢

遙か遠くからの・・・
私の想いはやって来て
かえって私を打ち
のめして去って行きました。

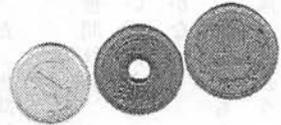
だから・ウチナンは
私にとつては・・・
遠すぎる儂い夢であり

アイヌモシルは・・・
私にとつては
遠すぎる影でもありました。

あッ・・・また雨が降って来た

暗
闇という
世界

01
11
12
秋
戸
空



〈再〉再生加工的新生・・・という・・・
大嘘付！世界の存在(あり)方

新植民地主義及び新自由主義の裡(うち)で
メディアの造り出す映像

無意識の裡(うち)に社会に
の毒牙(白人の意志)が・・・
入り込む・・・

合衆国アメリカの全(あらゆる事：)

世界支配を

造り上げてしまっている・・・

自分たちを

インテリ、と思ひ込んで勘違いしている
〈インチキゲンチュア〉たち

そして・〈先進国〉にまたまた

出現し始めた

目の見えない目明きたちの

群れ・ムレ・むれ・MURE

より、巨大な虚為を造り出して

許してしまうのなら
しまうだろう・・・

以前から〈先進国〉で出現し

始めていた

中産階級意識は、吐棄(しゃき)

すべき物なのに・・・

(反対、賛成)・・・意識の統べてが

麻痺させられて

何も考えられなくなってしまつて・・・

考える事といつたら〈Kar ency〉

に直結している物だけだ!

・・・ああ、・・・どう云う事なのだ!!

グローバルゼイションという虚構が

露骨にヨダレを垂らして現れ

〈ニッホン(政治機構)〉はダニのように・・・

いなおり〈侵略〉強盗軍Ⅱ〈合衆国アメリカ軍〉の

すねにかぶり付き、その(けがれた)血を

すすり盗っているとすれば、それは

いなおり〈侵略〉強盗軍と同じ穴の

ムジナなのだ!!

〈Kar ency〉をさらに多く

得るために・・・動く

資本家どもの手下・・・『勤労者』・・・

だから、資本家どもの〈罪〉はなおさら重い

それは、どれほどの民衆及び先住民を

死に追いやっているのか!!

それは地球をも破壊しているから・・・

〈世間社会〉では〈株券〉が

価値(いくら)価値(いくら)と・労働者も

喧騒の内(なか)に取り込まれてしまつている

資本家どもにその手下

マスメディアに魂までも

取り込まれてしまった〈世間〉の

『勤(労)働者』

生活があるのは〈世間社会〉のみに・か?

《すくいようのない、社会的?性格社会》

路上で生活するしかない

人たちも存在(いる)のに

彼らに生活は無いと云うのか・・・

悲しい事にこの国ではブルジョアジーも
プロレタリアート?(ナンテいたのか?)も
国じ処に立ってしまったているⅡ〈エセ民主主義〉



しかし私たちは〈強盗軍〉社会

の元で生かされているのだから・・・と
そこには、まったくの無自覚もあり

〈罪〉の重さも背負わされているのに
それにも気付かないし、無関心それが
〈スポーツ・ナシヨナリズム〉へと給

すびつけられてしまい・・・

人間の魂を持つ者としては

ドナルド・ダックをぶっとばせ!!
ミッキー・マウスもぶっとばせ!!
であり・・・おまけにUSAも蹴りとばせ!!

なのだ!

その答えを捜さなくてはならない・

私たちは・・・

〈合衆国帝国主義〉の

〈ヨーロッパ帝国主義〉|| EUの

人間の魂・それと肉体をも死に

金融経済体制など!

いりはしないのだ!

我々が生きる郷土(くに)を返せ!

このねじ曲がった〈世間〉があり・・・

お上のいう事をすなをによく聴く(臣民)

〈イカレタ〉、ニッホン社会

馳せ参じる自衛(侵略)隊PKFに

(公然の秘密:)

また再び〈タニ〉のように〈USAの軍隊〉の

スネにかぶりつき血を吸いとるJAPAN

強盗(侵略)軍(合衆国アメリカ)は

《先進諸国の大本営》の事なのだ!!

あらゆるメディアの造りだした

映像に・・・

誤魔化されてしまっている

庶民たち・・・

それでも〈強盗(侵略)軍〉のスネ

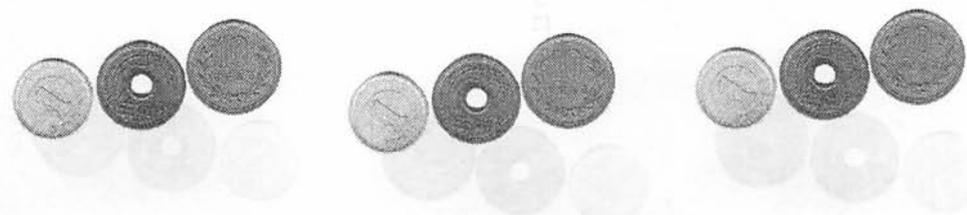
にかぶり付き・・・

その血もすすり盗っているのだから

強盗軍の〈先進国の軍事侵略〉を

助けるよう・・・救援(PKF)と称して

至らしめる



昂然と参加している〈ニッホン国〉

〈利得と現実の巨大な嘘〉があり・・・

（天皇家は、世界で1・2・3を争う財産家なのだ！）

こんな事してまでも〈Karen cy〉

〈ゼニ〉がほしいのか？

どれほどの人々を殺戮して来たのか・

先進国と名のる国家は・・・！

大戦後もずっと〈ニッホン〉社会〈世間〉も

そう言う気になってしまった！

今では〈先進国〉になったから、と・・・

暗白〈白人〉意識の世界が出来上がったのだ!!

アジアの民衆たちを〈イエロー・モンキー〉、と

繰別（くべつ）して差別しているのだ・・・!

我々、日本人だってアジアの民衆の

裡（うち）の一人なんだ!!

なのに、何時からか自らを〈白人〉だと

思っている

勘違いの思い違いの歴史が

積み重ねられているんだ!?

入欧〈及びUSA〉脱亜の

極悪のイデオロギーが・・・

〈ニッホン国家〉を今の時代も

暗白||白闇（しらやみ）の世界で

被われている

トラジ・コメディイとして・・・

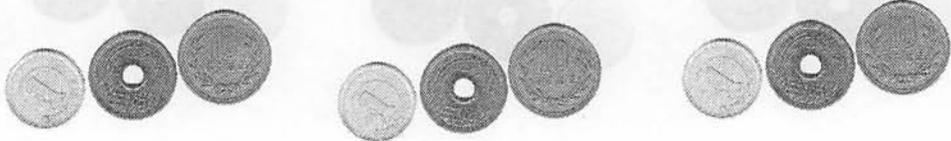
（ハルマゲドン）も来たとき

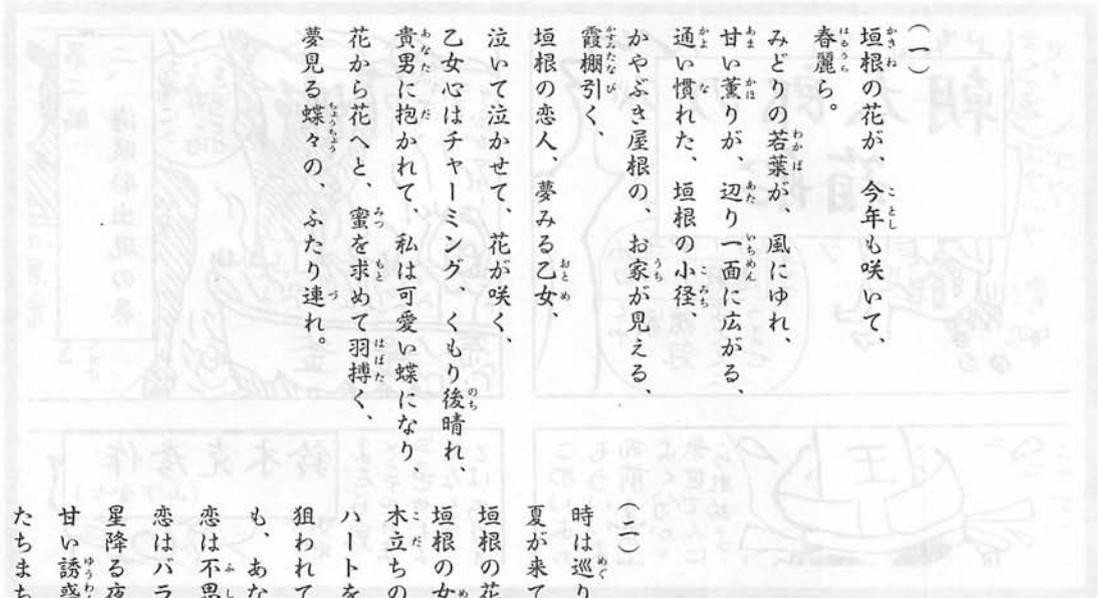
人間種のやる事のあまりのひどさに

呆れ返って立ち去ったにすぎない・・・

ほっばとつても、人間種は

自ら滅び去るだろう・・・と





(一)

垣根の花が、今年も咲いて、
 春麗ら。
 みどりの若葉が、風にゆれ、
 甘い薫りが、辺り一面に広がる、
 通い慣れた、垣根の小径、
 かやぶき屋根の、お家が見える、
 霞棚引く、
 垣根の恋人、夢みる乙女、
 泣いて泣かせて、花が咲く、
 乙女心はチャーミング、くもり後晴れ、
 貴男に抱かれて、私は可愛い蝶になり、
 花から花へと、蜜を求めて羽搏く、
 夢見る蝶々の、ふたり連れ。

(二)

時は巡り、春がゆき、みどりの風が吹き、
 夏が来て、青葉が胸に照り、
 垣根の花の、散る頃に、
 垣根の女神、囁きかける、恋のキューピット、
 木立ちの陰から、狙い撃ち、
 ハートを射止めん、白羽の矢
 狙われていますよ、御用心、あなたも、あなた
 も、あなたも、
 恋は不思議な、生物なのよ、
 恋はバラ色、恋はまぼろし、
 星降る夜の、窓辺のセレナーデ、
 甘い誘惑、魅惑の賛歌、
 たちまちあなたは、恋の虜に。

垣根の囁き
 ゆげこうすけ

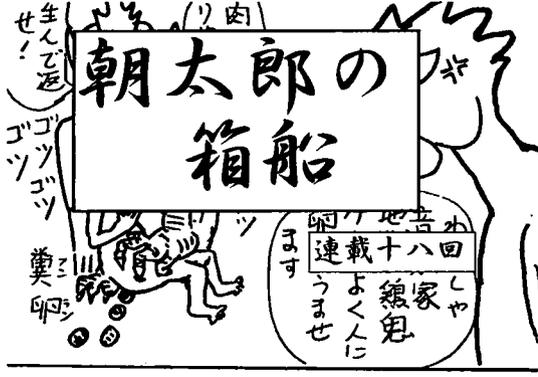
(三)

垣根の花が、今年も散って、
 秋深し。
 夕焼け空には、赤とんぼ
 四方八方、そこら一杯に群がる、
 通い慣れた、垣根の小径、
 秋刀魚の煙、仄かに臭う、
 夕餉間近かに、
 垣根の恋人、恋する乙女、
 燃えてもやして、花が散る、
 乙女心は、秋の空、
 くもり後晴れ、
 貴男に抱かれて私は恋する鳥になり、
 枝から枝へとハート燃やして囀り
 可愛い小鳥のラブコール。



第二編

二、海賊船出現の巻



鈴木克彦作 (山下金七)



一、労働歌の章

神さまの大洪水にサカラッて 生きて
 大海原をさまよったボヘミアン 世
 界中の善人悪人聖者に自虐者 大無
 能力者に超能力者 大自冒流者 大
 偏執狂者に大誇大妄想家
 上徳は無為だから人生何もせず 何も
 残さぬのが理想だが タイクツには
 かなわない
 だからひとつ 退屈しのぎに働こう
 労働もなまけることだと思えば楽な
 もの 強制されなきや嬉しいものよ
 天下万物無より生じ 無は有より生
 じて無に帰結する
 天気もいいし日はうららかだ 心は和
 やか喜び満ちて 見交す狂人らの明
 るき笑顔(注) まさに第九の大合
 唱が聞こえてキノウだが 誰も唱わ
 ない 聞えない
 船には命の次に大切な 食料の蓄えも
 少なくなっている 人は食ってクソ
 ひらなないと生きてはゆけぬ
 死にたくないなら食ってヒラにやあな
 らん バカな組合員みたいに会社に
 やいくらでも金があり 暴れりヤチ

ンギン何んぼでも上がるものだと思
 ったら間違いだ もっともコノゴロ
 は全く逆になってたらしいが
 アクマのパチ当りを覚悟して 善なる
 労働してみよう 空母のように巨大
 なエレベーターもあるから 発酵終
 えたヘドロウンチを船底から上げて
 土とする
 海から大量の海藻集め魚も釣り上げて
 食えるものは食い カスは土に混ぜ
 合わせてハッコウさせてミミズをフ
 ヤス
 広い甲板畑に変えて 野菜作りにハゲ
 ミましょう 牧草地も必要だ 狂っ
 た動物に新鮮な草を食わせよう
 耕作地は一万三千平方米ある 俺たち
 や田吾作上がりの巷の遊牧民 もの
 を産む玄ピンを奉じる玄妙なる狂人種
 植えればすぐ芽を出し大きく育つ植物
 うえてみよう 風に吹き飛ばされぬ
 よう防風壁も作ってやろう
 船底でヒフ病カイセン インキンタム
 シにノイローゼ 運動不足を殴り合
 いやらイガミ合いでストレス解消計
 った紳士に淑女たち
 頭を使いすぎておかしくなった妄想家

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

頭はコブだらけ満身創痍の勇者達
 健康な野菜づくりを楽しもう
 日当り良好 そよ風さわぐ甲板で思い
 つきり 命の葉っぱを育てよう
 ハンマーふりふりノコギリ引いて 鉄
 板やら鉄骨など 船底からはずし出
 し 段々畑をつくりカコイをつくつ
 て動物達を養おう
 嵐の中にタネをまき マメがなってキ
 ユーリがなって豊作になって 嵐の
 中に刈り取るう うまいジャガイモ
 食おうジャナイカ
 語り部のこの小ウルサイわたし奴も
 ハメレバ天国公園作りに精出して
 ゾ 命の謳歌 思い切りハメルため
 ブタ小屋 ニワトリ小屋 牛馬小屋
 犬小屋 小鳥の巣までこしらえよう
 愛の巣ならもつと良い
 コケを植え 草を植え木をハヤシ 林
 や森にしてしまおう キノコもつく
 り わらびもタケノコ アスパラガ
 スもはやしてみよう
 そうすれば 今迄一緒に楽しく辛く嵐
 の中を共に生きぬいてきた老人小供
 ゴク潰しを ウバ捨て海にナゲ込ま
 んでいいぞ

セツカク改心した元役人やケーサツ官
 を人余りのために処刑しないでいい
 中世の魔女裁判よろしく狂人時代の
 善男裁判 悲惨な民族争い イビリ
 合いも止められるからヤマラれない
 アクマの心は平和と狂人平等 明るく
 仲よくユカイに食って生きること
 木の上で青白く痩せてインキにノビ
 テルやつの心とは違つて ホテイ様
 みたいにお腹オッキ バカ声出して大
 笑いの御姿 幸とは食って笑つてハ
 メルことだと示してオラレルあくま様
 新しい我らの時代のタメにカブ植えて
 爺婆孫と犬と猫とネズミとでカブを
 引きマイテ みんなでカブカブ食べ
 て笑つて 幸カミシメましょう
 カスミ網を仕掛けて海鳥捕えよう ト
 ロール網で大きな魚を掴えようよ
 取った魚奴を 発酵終えた船底ウンチ
 室をキレイに洗つて 海水入れてプ
 ランクトンを増殖させて食わせよう
 小魚中魚の養殖も行おう 狂人国を
 治めることは 大魚を煮るが如しと
 老子もユウテおる
 水車を作つて回して粉をひき コトコ
 トコットン コトコトコットン フ

ファミレドシドレミふわーっと小供に
 歌わせよう(注)
 小川も作つて ロウロウロヤボート
 ジェントル ダウン ザ ストリ
 ム たのしいメアリーメアリー ライフ ラ
 イク ア クレージーと数少ない少
 女達に歌わせよう(注)
 朝太郎殿下のクレジニアとはアニマル
 ファーム 人・動物絶対平等 但し
 鳥の卵と魚はタベテいい
 海水汲んで真水に変えて牧場にまこう
 船首に当る波 甲板を焼く太陽熱を
 利用して電気をおこし 温水プール
 も作る
 船の中央には 無視無臭のアクマの礼
 拝堂を作りーでもこれは止めよう
 アクマは祈られることを好まない
 むしろ無視されることを望まれる
 唯一絶対的存在を嫌われ 無為と空
 が好きなお方
 やることは山とあり谷とあり海とある
 フカを捕まえて鱸の孵化場としたり
 海藻集めハッコウさせて出ガラシの
 ウンチ代りにガスをトルーギョロウ長
 ノルマもギムもないナマケてもよい
 遊び半分の気持でなければまた気が

狂う

お仕事は いじけた心を解きほぐす

悪い友とも仲良くなれる 伸びる命
をはぐくんで 動物達と同等に笑ひ
合える

フロンテア精神

ホーロー癖を十分に
楽しんで あっちこっちで好きに働
こう

少しぐらい働いたからといって威張ら
ない

働かなくとも怒らない 働か
ぬ者は後退するとは決して言わぬ

ノ一業長

ナマケルことこそ向上につながると老
子も言っておる

何もできない者ならば カニさんのよ
うに早く芽を出せ柿のタネと歌って

種の回りを踊って回っておればよい
でも早く芽を出せ実をつけろと あん

まり葉っぱを引つ張るな チンポと
葉っぱと髪の毛は 引っぱるほどに

悪くナル

額の汗をぬぐってパンと野菜と魚を食
おう だがも少しはエビカニ天井

小ネズミステーク モヤシのスープ
は続くだろう

朝はどこからくるかしら あの山こえ

て野をこえて―朝太郎船の甲板から

(注) クレジニヤ―クレジニヤ―

大火シューシュー 我し土安のん
狂人常 ジューマン(注)

田畑つくろう 娘を売るな 牧場をつ

くろう 首をくくるな ナツパをくれ

千葉県キ印港をい出ていく月ぞ―「忍
ぶれど色に出にけりわがチンポは

酒を呑もうぞと人の問うまで」

これはブロックヘッドの読める和歌
どんなに隠しても イ口氣違いぶり

は外に出てしまつて 酒でそれをご
まかそうという人がいたら一緒に呑

むのだが 船にはもう酒がない―と

ウタイとところだが 表現力がないた
めにテキトウにシメクツた和歌

というより海を呑もうと人に見られ
た―か

そんな歌が出るほどに これからいつ
まで続くか知れたもんじやない航海

生きていかにやらん思いを 労働
で忘れ 食うことを夢見る者の姿を

暗示しているようではないか なら
ば船底生活と同じじやないか

だがしかし アクマは自分を信じるな
信じる者は救われぬと言っておる

だから我々は 信じないことによつ
て信じよう

我々の先輩ノアさまは 三百日も海原
を漂つたが 我々は悪人だから五百

日かもシレン

だからこそ おお牧場を縁にしてよく
茂つたものだ(注)と驚かなくては

ならんし 夢をもってハメレば天国
公園つくらにやらん

ノア一家の七・八人家族ならいざ知ら
ず 二千五百のバカ共に バカバカ食

わせにやらん

反歌一題

「鬱病のクンに食わせにやらんと親
ガキが苦勞して働く箱船航路イミも

ない」

トシシユンも船橋にポケット立ておら
ないで 三年寝太郎もネてばかりお

らないで ロシアのイワンもバカバ
カしてないで

これから何百日もつづくか知れぬ水上
生活の 食いブチのため働こう 地

上六十億匹の中から選ばれた 貴重
なる悪狂人をウエ死から守つてやる

ために

アクマの恵み自然の恵みに感謝して

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

坐禅くむよりこやくみ(注) 下
手な労働ハタラクに似たりとニタリ
と笑って デカクて一杯なる農林一
号を植えましよう

カボチャの茎もサツマイモのつるも
頭はカラッポ腹の方はもつとスイテ
る者にはゴチソウ 御馳走をクワセ
中高年の余命イクバクもない 性殖
能力もない彼らに天国見せてやれ
すべからく人は食えれば天国なのだ
から

防風壁もビニールハウスも パン工場
も必要だ ベルシヤ帝国の空中庭園
ならぬ クレジニアの象徴 海上菜
園を始めようや

ブラブラしているブラチンも ブラッ
ックマンチョも ニヤニヤしている
デカマンも何もすることのないアホ
ーッとしたヒマチンも ひとつ退屈
しのぎに働こう

お菊のホテルに蝶チョのお客様 そよ
そよお風の吹くたびに揺れて楽しい
夢を見るため花も植えましよう(注)
キノコづくりにはキャベツ作り イワン
のバカもネズミのステークはもうノ

ーステキ 邯鄲の盧生もエビカニ天
井はカンニンしてくれ粟ガユ食って
天国の妄想をした方がいい 小クラ
ウスもモヤシのスーブは平口だ
イモを作ろうみんなのためにーイモを
掘る明け暮れクサリにつながれ 思

いはいつしかイモ食う姿よ(注)ー
クソ船のへりに佇む旅人 暗い地下
生活から逃げい出て(注) ナッパ作
りに精を出す

漁業も必要 イルカもシャチもクジラ
もドンドン釣ってドンドン食おう
捕鯨反対者にはクジラはもちろん
羊も牛もクワセナイ
ブタ小屋 ニワトリ小屋に牛馬犬小屋
も松林も竹ヤブも作りベニテング草
や笑い草 竹の子もハヤシてもごう
毎日毎日快晴の 青く風いだ海 青く
大きな空の下 上ばかり見上げてい
る空男

反歌ー大海原迎陵頻伽のなく声に い
く日も笑って見上げる船のソラ男
クレジニア国旗の下のプールにフカが
泳いでいる 立ち野菜薫る朝風に暴
れ泳ぐフカ上り(注) これを見る

のはフカ食い人間

「オレたちや悪人痴采農民は 決して
ウソをつかない怠けない ニコニ
コ笑って田畑耕すタネをマク
貧乏してもモンクを言わず 日と共

に起き 日の沈みと共に帰る
人という自覚をすてて 国家民族習
慣すてて自然という巨母の 度
すべき所に従って無上の農作業を
する

空と海に囲まれて 静かにイモ作る
ブルーびやくしよう(注)」
「ハラはメシを欲しがり ハダカはバ
ンツをホシガルが ハメル時は欲
しがりません勝つまでは(注)
命は生きることを望み 繁栄はチン
ポがマンポにハマルのを望む だ
からみんな働こう」

「古代か中世に 空中庭園だとか ア
レキサンダー王が乗った潜水艦
青銅の巨人 ハッシッシシ党などあ
ったというが ウッシッシシー
海上不沈菜園などはなかったらうよ
果てしもない大海原に移動牧場

波をかきわけ押しわけて
黄金を緑に変えて 緑を食べる
海上錬金術師アクマの百姓船は」

人間フロに入ればみな同じのフロ作り
人間食うことクソヒルことはみな平等
アクマ狂典によれば 人間はカシコク
ない方がよいとなっている 進化は
人間にとってマイナスだとも書かれ
ている ユエニ人より優れた狂人が
普通人に前ナラエ 和光同塵になる
ことは辛かった

だから我々 ホモ・サビエンス・サビ
エンスから クロマニヨン人となり
ホモ・エレクトウスやホモハピリス
になって プロコンスルになって有
尾人 猿になって キツネザルにな
って 原始ネズミになればよい
それにしても船人には まだ農耕民族
遊牧・漁業民族になれぬ者もある
二次産業三次産業出身者 石頭・芸
術ヤサンたちには向かないようだ—
ギョロウ長談
こんなヤツらが田畑作業場あたりをウ
ロウロと右オウ左オウされては仕事
がやりにくい

畑の中で一日中奇行奇声をハナツたり
呪文称えて歩かれたんでは少しく邪
魔ではありませんが—船底でサンザン
いびられたマトモ人 地獄の苦しみ
とオカシナ刑まで食った石頭連が
ノド元すぎれば熱さ忘れて

こんな下らぬ労働デキツカ お前ら働
けワシラは管理する 看視するワシ
らはもっと高度なシゴトがしたい
上級仕事にアリツキたい 百姓を守
る武士でありたい 収穫計算の役人
でアリタイとウメカレては迷惑[⊕]ビ
ト 田吾作根性に燃え出した痴呆連
ユスリタカリ イバりに博打うちには
食わせたくないと鼻をブーブーナ
ラス

人並に狂人並に食うくせに 働く者を
笑って見下すとは何ごとか 手伝い
しなくとも 邪魔しなければ少しは
食わす アッチに行つてくれと不平
をコボス
これじゃ船底生活の二の舞ではないか
それに加えて別のグループの芽もハ
エル

朝太郎が クレジニアを目指し ナマ
ケて働けという夢と精神の大義名分

は ヤサイの芽と反対に なかなか
育たない

されど人々幸にミチ 多くの者がアレ
ヤコレヤと働くコンニチの姿

アクマさまも喜ばれよう

海草場の陰で 真に百姓で真にギョロ

ウに従事した労働者のみなさんも

ニッコリ笑って見てるだろう(注)

三界の万霊に供養しよう

南無三世一切アクマ この功德をもつ

て 我等衆生と共にアクマ道に乗ぜ

んことを

おおーおお おおー

(注) は、引用、書き替えたもので、必
要があれば(著作権などの問題)、これを
正式に届ける用意があります。

哀しいイカの話

五林修



工藤梨香子が観る

左のWing 佐藤成俊

右のForward 山岸巧

勢い良く飛び込んで来た

“ヨシッ!!”という想と同時に自分の

ポジションを確認した。

オフサイドはない。“ヨシヤッ!!”

シゲのセンターリングはタクミの体を見ごと

ゲット、タクミにピッタリ。ピッタリ胸に

当って、ルーズボール。(タクミはスキー上手いけど、トラップ下

手。因みにシゲもスキーバカ上手)

ゴールエリア内で高く掲げたボール。

敵陣のDF、GKも自分たちも

長い長い時間をすごしたよ、

ほんの2、3秒の間にね。

工藤梨香子が観る

木谷明美もいた

頭が沈んだ、俺の頭が

青空のスクリーンに、黒い、しかも重い

ナマリの(鉛)球形の物体

五角形と五角形の縫い合わせ、

何故か、そのシユンカン見えただね、ホント。

野球の神様といわれた(らしい?)

その人が、ボールが止まって

みえたみたいに見える

張ってまかり通る世の中だよ。

しかしながらその野球の御人とは

次げんが異なるけれども、

やっぱ止まって見える事もあるんだね

頭がスーッと沈んだと

想ったときには既に

俺はオーバーヘッドキックを敢攻していた。

ゴール中央をつきさした。

ネットが裂けて、そのボールはとなり会場の

のゴールまでゲットしてしまった

そんな事もあったよ。

工藤梨香子も観た

木谷明美もいた

試合は勝った：俺の活躍で

木谷明美は言った「カッコ良かったよ」

工藤梨香子は黙して語らず

木谷明美は言った「だけどヘディングなんかすんだべさ!!」

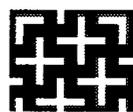
傍にいた工藤梨香子が微笑んだ

「だってイカみたいだったもん」



大田寮「死からの脱出」

あずまきよし



泪橋

午後16時30分だった。

これから、どうしようかとまよった。とりあえず泊る宿を捜さなければ。

ちょうど、目の前に東洋館があり、そこに泊った。

その晩、飯も食わないで寝た。

うなされて、目がさめる。時計を見ると、午前2時ごろ。ああこれから大変だ。どうやって生活をしていこうかと、おもうと、やけに腹がへる。金を見ると2500円しかない。

旅館の主人が、こんな夜中にどうしたのかと、心配げに、ゆう。腹がへった、このへんに弁当を売る店ないかと、聞くと、主人が旅館を出て三つ目の信号の所に、24時間営業のコンビニがあると聞いて、とことこ歩いて弁当を買いに行った。

ゆうべ食っていないから特別旨い。

テレビを見て、また朝9時頃寝た。

目がさめたのが午後1時だった。

10月だというのに、やけに寒い。寒いとむかし凍傷で手術した足がよけいに痛い。

どうしよう。墨田区役所に相談した所が全然ダメ、相手にしてくれない。次の日も墨田区役所に何とかしてくれと頼んだけど全

然ダメ、次の日の朝9時旅館を出る。

行くあてもなく、歩くと足がずきずき痛い。これからどうしていいの不安でたまらない。足さえ健康であれば仕事できるのに。頭の中は後悔で一杯です。

ええ、くそ、ヤケクソ、死んでもいいや。

自動販売機でチューハイをのむ。お金はあと見たら二〇〇円しかない。今晚はどこで寝よう。マンモス交番に相談したが、全然相手にしてくれない。

城北センターの前でうろうろしていたら、見た感じがホームレスとすぐ分る男が声をかけてくる。チューハイを飲ませてくれたのむ。

俺もこまった。200円しかない。自分も飲みたい。じゃあ仲間じゃないか、半分づつ飲もうといったら買いに行った。そしてその晩は毛布を貸してくれた。

初めての路上生活が始まる。寒い。足が毛布からでる。腰、足、冷える、眠れない。震える。

腹が空く。暖かいラーメンが食べたい。

まだいいほう。二日目は隅田川の堤防で寝る。

10月なのに特別冷える。ダンボールを下にして寝ていたら、仲間がそれじゃ死んでしまうぞといわれた。

三日目もまた同じ場所です。それから路上生活が一ヶ月も続いた。とくに腹が空くのはまいった。

交番に行ったら、おにぎりと、茹卵をくれた。それから10月19日隅田公園で緊急一時保護センター大田寮の募集をしていると聞いて、まだ生きてるのかと思いい、一度死んだんだ、もういちど生きてみようと思いい、10月20日隅田区役所に面接にいったら、大田寮に入寮できますといいい返事。

俺の体も睡眠不足、食不足で限界にきている。次の日入寮できなかつたら死んでいた。

入寮できる。

暖かい飯が食える。フトンに寝れる。人生のうち一番うれしかった。

大田寮に入寮するとO課長さんが、いちばんいい昭和大学病院を紹介してくれた。診察に行ったら足は専門の病院にいくこと、内科、眼科も。体はがたがた。

大田寮で死んじゃうのかと、夜いつも頭に浮かんでくる。

平成15年11月6日記

大田寮にて



御願い

宗春

経済不況に對しての不満が続くこんにち。

今、何を考えてゆけば良いのかが問われる時代だと思えます。生活苦、リストラ等に於て、全国で自殺者は三万三千人とも言われています。これらはニュースにもなりません。そして、失業率五・三%、最も最悪な時代と言えます。こうした状況をどのよう
に考えたら良いか？今の所どうすることも出来ないのが実情です。

我々の仲間のことについて、行き届かないのかも知れませんが路上生活者支援として各公園を廻つて、出来ること、食べ物や下着類等々を運ぶことや、青空トコヤを行い仲間の散髪に少しでも役に立てばと思ひ、人生の仲間として、これからも体の続く限り奉仕に勤めてゆくつもりです。

でも、これらのことは四、五年前、私も仕事がなく、困難になつた時、皆様の尊いカンパで理容器具が一式揃いましたが、心ない人に全部持つていかれ、今は使ひ捨ての器具を使つて散髪をしておりませう。が、私も保護の身であるのでそう続くものでなく、床屋の器具が不足がちで困つてゐる次第です。

も一度御願いです。どなたか古い器具がありましたらおゆずり下さい。宗春、この書面をお借りして宜しく御願ひします。

住所 品川区勝島一の九の一 浜川荘 松下弘まで。

歌集

亡国の旗

PART 3

望月大成



ありがたや おテント様に見えねども

痴女のお股の

日ノ丸の旗

お笑いや 日本のサツは岡っ引

オウムの尻尾

いまだつかめず

一世紀 たてば尊師はよみがえり

日本列島

講談の国

とも食いで生き血ばかりか骨までも

馬は音なし

日ノ丸の下

死ぬならばせめて日ノ丸 シート巻き

同期の桜で

馬の葬式

馬人は国なき民ぞ 願わくば

捨てなきものは

日ノ丸の旗

お賽銭 盗めば馬も檻の中

ドケチ日ノ丸

神も仏も

行倒れ 屍馬の幌の上 何もなく

せめて日ノ丸

金鶏勲章

オウム見て真似てみたきはサリンまき

黒装束を

一把からげで

馬落し オウムのわざはいらぬなり

人のはみ出し

生きてポアせば

日ノ丸を立てて正月 三賀日

今年もニッポン

馬作る年

時くれば落ちゆく花は一つ穴

オウム、日ノ丸

同じ殺し屋

ものありて民貧しきはこれいかに

我が敷島は

人も馬死に

日ノ丸の国旗を焼きて初詣で

心さっぱり

新年の明け

人がみな馬になる日ぞ おかしけれ

大和敷島

馬の牧場

馬ごころ 慰めかねっ 玉姫や

馬捨山に「本歌取り」

照る月を見て

心では秘かに待てるハルマゲドン

我が馬宿を

一つ残して

敷島は未だ火だるま 泥の舟

ハルマゲドンは

宵の口かな

ホモなれば菊と筍 相性よし

天ちゃん一家

大奥の部屋

玉姫のテント屋見れば思うなり

こゝは神国

日ノ丸の国

亡国の反対デモにデカの列

物見遊山

カメラぶら下げ

集会場 表でデカがお待ちかね

金魚のウンコ

末の末まで

岡っ引き 身の分際をわきまえず

その正体は

やくざ屋の犬

過激派も元はオウムの馬育ち

神がこければ

次は袂で

赤旗は山のプライド お仕着せの

馬の衣装は

ドブ捨てのボーイ

出張の稼ぎごっそり ウン十万

日ノ丸犬の

手癖悪さは

亡国の旗にふさわし もがき馬

白色ゲリラ

日ノ丸の笠

馬人の行く先々に御検問

荷物改め

国の旗なし

云わずともここは掃きだめ 馬捨山

日本列島

馬作る国

貧しきを清き証と呼ぶなかれ

馬捨山は

日ノ丸の恥

血の色は垢とほこりの年期入り

これぞ山谷の

人民の旗

デモの列 追うは日ノ丸 愛国党

餓鬼が生意気

街宣に乗り

ノーなしの馬將軍は乃木神社

勲章うけは

バカも神様

バカ、し 趣味で閑人 歌作り

歌会始め

天ちゃんの歌

祝うなら常に赤旗 日ノ丸は

馬捨山に

洋梨の旗

革命の戦士旅だち 人民葬

国旗燃やして

赤旗の列

花ならば菊にも勝るさくら花

コー門よりも

前門の花

勝目なきいくさにあれど日ノ丸に

馬空猛進

戦士玉碎

演歌節 まだましかもや 君が世は

仁侠唱歌

国辱の歌

大日本? 何で大の字 こゝなるは

チビッ子ニッポン

悪餓鬼の国

かき分けて歩む仲見世 浅草寺

オカルト日本

日ノ丸の国

大成

もしかして天皇陛下は百日紅さるすべり

お脳のしわが

たった三本

馬子

噂では皇后陛下も百日紅

股のお毛々が

たった三本

神様にほんにもてゝ 天照

連日連夜

岩戸を開き

生理日は日ノ丸立てて御休息

今宵お休み

天ノ岩戸は

日ノ丸や 馬に国籍はいらぬなり

こ、は異郷の

馬捨の島

長じては鉄砲かつぎ 侵略者

餓鬼に日ノ丸

君が世の歌

夏枯れて天ノ岩戸は枯すゝき

テンシヨーダイジン

老いて婆様

天皇家 男世継ぎも宜なべなるや

菊の紋章

ホモの証あかしは

山谷には白地に赤はいらぬなり

赤旗のみが

人民の旗

日ノ丸を尊ぶ心 さらゝに

馬人国うまじんは

祖国ならねば

打たれても皮にされても音なしの

日ノ丸牧場

調教の馬

VH まくにてあらば皇居前

洋梨畑

ニッポンの恥

君が世は天皇陛下の夫婦唄

天ノ岩戸に

苔のむすまで

皇后にしたき人あり 原節子

姿見えねど

永遠の処女

ニッポンは男名利のホモの国

とんでもハブン

女天皇

皇后は四十で定年 奥の院

婆の馬ヅラ

民にさらさず

恥を知れ 婆づら下げてお立台

立つなら被れ

お多福の面





いさむ

今日から師走に入る。外は朝からやるせない雨だ。一雨毎に寒気が漂う。冷えて来るに従い腰痛が私を悩ます。ただなんとなく冷蔵庫をあける。「さうだ玉葱の残りが残り、豚肉はないが、ひき肉がある、夕食はカレーにしよう」

早速準備にかゝる。でも以前の様に我ながら見事な包丁捌きは出来ない。台所にて椅子に腰をかけ馬鈴薯の皮をむき始める。

意外にも腰に負担がかゝる。ヘルパーさんが食事の用意をしてくれる。その有難さを味わい乍ら、途中で下げ出すわけにはいかぬ。馬鈴薯を切り、玉葱も切る。切り上げたものを鍋に入れ油で玉葱が柔らかくなるまでいためる。水を入れ煮込む。その合間に今迄体験した事のない、誰かと喋っているように、ひとり言。

「あ、今年もあと一ヶ月、この一年無意義に過ごして来たなあ、仕方が無いもんな、腰痛だもの、介護まで区から認定され、ヘルパーさんの訪問とデイサービスに通所、後は病院での診察と治療、後はベットに横たわるだけ。」

早く新宿や、もやいにも顔を出し度い。自分の未熟さと、哀れさだけが身をつむむ、俺も、年を取ったものだ。若い時は好き放題の事もし、束縛も経験したが、満足と言ひようがない。第二のふるさと新宿、共に苦勞して来た友は元気でいてくれるだろうか。

身体は悪くとも生きていけると言うだけで倅でないのか、過ぎ去

りし日を思ひ浮べると一体、人生とはなんだったんだ、後いくばくもない人生に夢や希望があるのか。死を考へてみると、なぜか怖い、でも死は必ず遅いか早いか訪れて来る。雨音が私にさゝりさかける。

「せめてその時の来るまで、なんでも良い善行を重ねてゆき、人のために努力さえすれば、人として誇りを持って後悔などする事なく、往生出来る」と、あゝ出来ることなら若い昔に戻りたい。私が自分に誇りを持った少年時代があった昭和二十年三月、戦時かんばしくない時、少年戦車隊に志願し入隊の時に日の丸の旗に添書きをして襷がけ列車に乗り込む際、子供ながら「この身は国に捧げるのだ」。

だが残念にも僅か五ヶ月足らずで終戦、それから転落の道えとはまっていた。

でもあの頃は怖さなど感じもしない。人は七転八起きと云うが、転ぶばかりで、起き上がる事をも今でも出来ない。現在でもどれだけの人に迷惑をかけているのか、何人親しい友人がいるのか、でも良かった。例え僅かでも私の身を案じてくれる、もやいの事務局の人がいるではないか。その人達の温情に報いるだけでも、いや報いなければならぬ。人間として。」

つまらないひとり言を言っている内に、鍋の中は煮詰まっていた。久し振りに作ったカレーを味ひながら、余生を無駄なく送ろう……。

年は明け今年こそはと、又ひとり言

山茶花が 雨に降られて 散りてゆく

そのはかなさに 我れ胸 痛む

「露宿」(ROJUKU)一九九九年六月創刊号

↓二〇〇四年一月二八号、

新しき年を迎えて路上の大地に咲いた、
一筋一筋の香り高き生きた声の集花

田代 猛

一、さざんの花は種類によつて咲く時期は異なるが、初冬の花は白く輝き、人々の心を慰める。その白い花ピラは、大地に散り落ちて
も、大地の上のその白い花ピラは、ふと人々の眼を大地にすいよせる。省りみて、そんな「露宿」に育てて芽を大地に生き生きと芽生えた「露宿」の静かな、静かなるその足跡。

一、淋しさに馴れてしまいぬ、何一つ変らぬ暮しの居室にシクラメンの白き鉢、

一、この朝、幸福の絵を切り取りぬ、夕には孤獨の初冬のウロコ雲、
一、都心より富士の見ゆる日、冬来る。

一、三万の失意の自死が続くとき、イラク支援は五十億ドル
一、貧しきを憂えず、等しかざる憂う、社会のシステム

一、「個」の哀しみを語るとき、「個」の苦しみに悩むとき、「類」
としてしか語れない人間存在そのものの、哀しみ、苦しみがあ

るのではなからうか……。ふと空を見上げると、空一面にウロコ雲が飛んでいた。雲はおりから沈みゆく初冬の夕陽に赤々と照らし出されて、その美しさと、不吉といえる雲のたなびきの中に現代社会の底の深さと云うべき姿が心におぼえる。
一、様々な角度から見る社会のあり、雲から窓を、虫から花を：
。。。

一、不平等、格差の拡大と云う不条理に対する怒りが余りにも感じられない二大政党論。

一、冬があり、夏があり、昼と夜とがあり、晴れた日と、雨の日があつて、「ひとつ」の花が咲くように悲しみも、苦しみも、あつて、私が私になつて生きて行く。老いて老いて、心に感ずる暮れ逝く初冬、或る日の感傷でした。

一、老の日々にとりとももなく居る吾の心に眩しシクラメンの紅き蕾。

一、病院は人の世の縮図めきて、混む静かに眠つぶる老あり

国立国際医療センター(循環器内科待合室)にて
一、「いのち生きなおす」僕や、あなたは、人生の最後をどこで迎えますか。絶望の後に、人は僕やあなたは何に希望を見いだすのか……。

新らしき年を迎えるにあたりふとそんな心が一瞬胸を去来する。

十一月或る日の初冬の人生の刻み

昨日は一日初冬の氷雨が降りしきる一日でした。今日は初冬の
青空が耀^はやき、淡い陽光が人々の心に刺すような心暖かくなるよ
うな一日です。「露宿」愛読者の皆さん、そして社会の底をするど
く刺すような或は心優しく人の心に夢と希望を與える投稿者の皆
さん、そしてそれらを編集して頂き、貧しき弱者に路上より「露
宿」として一つ一つの灯の声を集花して頂く編集室の皆さん、そ
の一つの一つのたくましく心の輪が今日迄の「露宿」を生きた現
実の社会の日の一隅一隅を照らし、やがて奔流^{ほんりゅう}の如く社会の現実
の大海にそそぎ耀^はくであらう。

「愛読者」皆様、「投稿者」皆様、「編集室」の皆様、
そして大切な大事な「露宿」よ、有難う、有難う。
抱いた望^{のぞみ}の谷間の白百合もじつとじつと微笑^{ほほえ}えんで見守ってく
れるだろう：

皆様の新らしき年に幸あれと祈り願う

十一月二十六日

俺の血と夢
血とは ~~主人~~ 人の物語の
主人だと思ふ、でもかたはらずも
そうでもない、血は人の魂
なのかな、せし山谷に生きて
来えるようになったのが、
俺は、どうしてホームレスになつた
のか、宿命とは？ 運命とは、
不思議なものだ、
どうしてゆめを求めて、幸世に生きる
人と、不幸の屋の下に生まれて
くる人、バカな人、リニアな人
どうしようもない、俺の夢

俺の厨^く。
俺には命があるこれは事実である
だが死ねずわけには？ あ
生かして生きては、と来える。
生きる厨^く、最下か、でも何も
かわらない、もともとして下に行くのだ
ろうか、悲しみと苦しみを冷たいだ
いの素^{もと}ホームレス 無能力者
高級の生活かしてみたい、命

平成・前期・私的雑感!!

プライベート

幻人・アル・カホネ



平成時代を約三〇年間と推定すると今年平成一六年以後は平成

前期、平成元(一)年〜一五(去年)年間は前期ととなります。

前期のプライベート雑感を書き記します。

平成時代は平安時代の亡霊の再生クローン時代：没落平家・赤

旗(アカハタ)再生軍団の御登場!!となる訳。

しかし、平家亡霊軍団の再生は、ひそかに明治維新〜現在まで
続行中なのです。

明治〜現在までの差別イデオロギー：日本の諸悪の根源は○室
と東大にあると思われます。現在の○室は南朝系長州・御首領様
の血脈?説があり、東大のシンボルは赤門(旧・加賀藩前田家所
領)です。すなわち、平家系となり南朝も同様。

旧東京帝大卒業者は仏教系の没落平家の子孫が多く特に壇ノ浦
(下関市)で有名な山口県(長州)や旧平家落人部落の鹿見島県

(薩摩)、宮崎県、熊本県、高知県等の出身者が多く、彼等やその
一味の分共、子孫等が明治は愚か現在の平成時代も政財界、学界、
マスコミ界、芸術・芸能スポーツ界に至るまで榮耀榮華を極め尽
して居ります。

もう：そろそろ平家子孫等の彼等には御退場!!願ひ度いと思っ
のですが、平成時代が終了するまで：おあずけ!!と云う事になり
ます。

平成後期の今年平成一六年から彼等平家・赤旗の驕れる肉體、
精神、精霊は、久しからずに、衰微滅亡の大暗海に沈淪せざるを
得ないでしょう。

冬の朝、歩みの (遅い) へいげに 平家蟹!!
(呪い)

源氏白旗の子孫軍団は右記の俳句に呪詛を込めて切齒扼腕中の
筈!!

まあ数年前から源氏亡霊軍団の再生武士団が復権してます故、
明治〜現在まで不幸：不運の連続で露宿生活を余儀なくされ：転
落の屍臭に脳乱されて居られる方々にも幸運の微光が耀き始めて
きますので、もう：しばらくお待ち下さい!! 平成後期からは、
源氏白旗軍団が旗上げし、弱者救世救済軍団(ポランティア)が
大活躍する事に決定!!してますから。

平成前期に現代の源氏軍団が旗上げしても多勢に無勢でメチャ
クチャに押し潰されて肉體も精神も精霊もゼロ、

スリーゼロ
3・0にされて現代の平家：専用^{△△}の無限地獄に監禁^{かんきん}されるのがオチ^{◎◎}です。今までは平家の方に隱身・変身して居た人々も、現代の平家が落ち目になって来た今年から現代の源氏軍団の一兵卒、一員である事を旗幟^{きせう}鮮明^{せんめい}にするでしょう。又、それと同時に次の新時代は源氏が支配する事を察知して一早く味方の平家を裏切って源氏に組^{くみ}する：好軍兵士も、チラホラ出て来ます。

去年 (H・一五年) 一一月の乗議員選挙後の当選者の当選後のアフション (身の振り方) を見てもその事が如実に理解出来るでしょう。不幸不運は勿論遠伝子や自分自身の生まれてから以後の日常生活行動思想が原因^{げんいん}になります。時代背景^{◎◎}や時代風俗^{◎◎}時代黒幕^{◎◎}が大なる要因である事を再認識・再確認すべきではないでしょうか!! 不幸不運の原因を100%自分自身が悪いのだ!! と：押し付け強弁するのが、仏教系の現代平家軍団の不幸不運者軍団^{ぐん}に対する法脳操作マキャベリズム以外の何物でもありません!!
御用心、

(九紫・火星・西・赤口)
平成一五年一月二〇日 (木) 雨

原宿図書館にて

山谷の季節

昨日も今日も明日も了オカン
自身が死ぬまで続^つるのが
夏は力にさせられて、冬は冷たく
春とか秋が~~毎年~~よく眠れる
俺たちの季節、
寝ると、食^くる^はが^もた^いない
呑むこと^は~~呑む~~人^もい^る
いつになつたよ山谷が^いて^いく^よ
うに^もた^いる^のか
新しい別の生き方を探して

わが妄想

俺は偉^いんだ、誰^もも、そう思^わ
る^んで、山谷で生きていくのは
むずかしい、ホームレス、この世で
最下層^{さげ}、一番最上層^{いちばん}だと
考えて生きている仲間、俺は偉^い
が、ホームレスになれるのだ
一般社会、文化人はホームレス
が出来なくて、かわいそうなのだ
路上で寝れる、かわいそう
な人^{たち}、

今日一日

只野酔払



あけまして、おめでとうございます。アルコール依存症のロダ
ンです。本年もよろしくお願い致します。

××× ××× ××× ××× ×××
今日一日……………○

今日一日……………△

今日一日……………×

今日一日……………▲

今日一日……………◎

今日一日 お酒を飲まないで過ごそう

今日一日 お酒を忘れよう

今日一日 心おだやかに過ごそう

今日一日 平安が訪れますように……

今日一日 感謝 そして感謝

今日一日 歩く

今日一日 歩く 歩く

今日一日 お酒を飲まずに歩く 歩く

今日一日 歩けることに感謝

今日一日 お酒を飲まずに過ごせたから

今日一日 歩きつづけられたから

今日一日 私を大切にしてくれたから

今日一日 あなたも愛したのだから……

今日一日 安らかに眠ろう……………。

四年前の話です。

平成十一年十二月十九日、当時、北八王子駅近くの飯場で働ら
いていた。

日曜日は仕事は休み、朝十時に寮を出た時、八王子に行こうと
思っていた。

八王子まで約四km、ゆっくり歩いても一時間ぐらいで行ける
距離だ。道々、酒を買いながら、飲みながら歩いた。JR八王子

駅はSOGOだ。それまでにビール五〇〇ミリリットルを六本、
二五℃の焼酎を六合位飲んでた。SOGOの地下一階で、五〇

〇のビールを二本買い飲んだ。記憶はそれまでだった。
××× ××× ××× ××× ××× ××× ××× ××× ×××

気がついた時は、警察の留置所だった。

「ここはどこだ!! どうしてこんなところにいるんだ。」と叫んだ。

「気がついたか、ここは八王子警察署だよ。君の名前は?」と、
問われた。

少し間を置いて……。

「名前は忘れました。住んでるところも忘れしました。」と、返答し

ていた。黙秘です。同じやりとりが数回あって、すこしずつ記憶が戻ってきた。

「SOGOで飲んだまでは憶えているんだ。その後が思い出せない。」と、いったところ、

「OIOIの二階で大の字になって寝ていたのだ。ここまで連れてくるのに大変だったんだぞ。」といわれた。そして、

「名前と住所を教えなければ外に出さないよ。」といわれたが、最後まで黙秘を通した。

目が覚めたのが朝の五時、警察に来たのが一五時ころだったよ。うで、なんと、一四時間もの間、眠っていたのだ。私には全く記憶がなかった。

この日は仕事のある日だった。以前にも、酒を飲み過ぎて問題を起こしていて、もう飯場には戻るつもりはなくなっていた。

その飯場には七月一八日から働らいていて、お金が入るたび連続飲酒になり、その都度、無断欠勤をしていて、今度という今度は駄目だろうと思った。それが黙秘につながった。

九時になり、警察の方でも諦めたのか、

「出て来なさい。預っているものを返すから、ここに署名して帰りなさい。」と、いわれた。

『只野酔私』と、署名して警察を出た。

給料が前日であったため、お金は一五万円程持っていた。着のみのままだった。新宿中央公園にダンボール・ハウスを持っていったから、そこに戻った。八王子から新宿まで、酒やビールを飲みながら……。

二日酔いで頭が痛かったが、徐々におさまってきて、新宿中央

公園には昼過ぎに着いた。小屋の方も以前と同じだったし、残しておいた衣類等もそのままだった。

一月二〇日の事だった。四リットルの焼酎、大五郎を二本ぶら下げて……。

××× ××× ××× ××× ×××

ダンボール・ハウスの事を頼んでいた人が西新宿五丁目にあるM建設に勤めていたので、すぐに面接に行き、日払いで日勤で六〇〇〇円、夜勤だと七〇〇〇円、働らく日は朝昼夕と三食付きで週に三日働らく事にした。食べる事と、寝る事には困らなかつたので、風呂代と洗濯代の他は、働らいた金は全て飲み代になった。仲間が常時六人位いて、毎日飲んだくれていた。仕事のない日には、朝から宴会だった。

××× ××× ××× ××× ×××

それは、悪夢の日だった。忘れもしない。一二年二月二五日朝七時三〇分ごろの事だった。ろうそくを灯して、ひとり小屋で酒を飲んでた。四三℃のウイスキー、ロイヤルを。寝不足と飲み過ぎで、つい、ウトウトとした。夢うつつに熱いと思った。目が覚めて、何と火事になってた。うつ伏せになって起き上がるうとした時、コップに注いであったロイヤルに引火した。顔がそこにあつて、顔一面、大火傷を負った。着ている服も炎になった。飛び出すなり、「火事だ。」と叫び、炎の服を脱ぎ捨てた。近くの仲間が大勢集り、消化に当ってくれた。まもなく火は鎮火した。消防車もやってきていて、火傷をしている私を救急車は東京医大に運んでくれ、即、入院となった。一六Fにある火傷の治療病棟だった。顔ははれ、まもなく目は見えなくなった。二四時間、四八時間と点滴は続いた。ベットを離れる時は、常に看護婦さん

の介護を必要とした。

見えるようになったのは、二六日の夕方だった。夕食後の事だった。

幻覚と幻聴です。この時は現実の体験だと思っていた。

幻覚の始まりは、ドラエモンの世界で楽しいものだった。そして、おとぎの国だった。こびとが大勢集っていて、ポリシヨイサーカスマがいが始まった。不思議の世界が繰り広げられた。やがて、こびとたちの親方がこびとたちを集めた。このこびとたちは、私の病室をもモザイクしていたのだ。親方は、

「全員集合したら、帰るぞ。」と命じた。

「酒を飲みたくないよ。」

と、ひとりのこびとがいった。

親方は、

「金はないよ。」

と、いつて、

「そうだ。ロダンに借りよう。」

と、手をたたきながらいった。

親方がベットのそばに寄ってきて、

「ロダン、お金を貸してよ。」

と、いつてきた。

何故、名前がわかったのだらうと思ったが、ベットの頭の所に名札があるのを見て納得した。

「お金はありません。」

と、答えたが、

親方は、

「こんないい部屋に入院しているんだ。たくさんお金があるだろう。さあ、金を貸してくれ。」

と、いい寄ってきた。

私は、千円札を敷布団の下に隠して、実際は、入院前日、夜勤だったので、七〇〇〇円に、その前からの所持金を合わせると、千円札一二枚と、小銭が二五〇〇円位あった。小銭入れのサイフを見せて、

「小銭がこれしかない。貸すわけにはいかないよ。」と、突っぱねた。

一旦は諦めた様子だった。

しかし、みんなが集ってきて、

「ロダン、金貸せ!!」 「ロダン、金貸せ!!」

と、連呼し始めた。

帰るのではなく、病院のまわりを歩きながら、連呼しつづけていた。今、思えば、一六Fなのに、病院の外まわりを歩いているのだ。

まもなく、点滴を吊る棒や、電気スタンドや、天井についているフック等が、凶器に変わって、私めがけて飛んできた。

小びとたちは、あらゆる角度から私をねらい始めた。

隣の部屋からは、読経の音が聴こえてきた。

この病棟には、このロダンしか入院してないはずなのに……。

この章つづく

××× ××× ××× ××× ×××

紙面の関係で、ロダンの近況を記したい。

退院は、七月一五日、一時間の開腹手術から一九日目。

一六日からAAAミーティングに出席し続けた。

二日から、百人町の老人施設で、囲碁のボランティア、月、火、木、金の週四日、一二時三〇分から、一六時まで。

七月二六日、土曜日から、土日祝の不動産会社に復職した。とにかく、歩くことを心掛けた。

八月から、にしき町グループの活動内容が大きく変わったことから、グループを抜け、フリーで歩かせていただくことにした。

そんな生活を九月一杯までやらせていただいた。

一〇月から、平日も働らく決断をして、一〇月八日、高田馬場にある、無料職業紹介所、新宿わく☆わくワークに行き、就職活動をしました。

運良く、その日、新宿サブナード地下街の会社の面接が翌日に決定した。

一〇月九日の面接で、土日祝、仕事をしているため、平日一日休日を欲しい旨お願いして、その結果、月々木の一〇時から一六時までのパート勤務が決定し、一一月一四日から働らかせていただくことになった。

かなりハードな仕事だし、未経験の仕事でもあったが、トライしてみたいと思った。

約、一ヶ月位は大変だった。五時間で終るはずの仕事なのに八時間以上も費やしても終らなかつた。

一一月に入って仕事も馴れてきたのだが、疲労がピークに達してきた。

やはり、癌という病気は大変な病気だと思った。

抗癌剤を服用し続けなければならず、月に一度の診察は必要だった。

辛いなことは、抗癌剤の副作用が全くなく、癌の再発の心配は

自分はないと思われることだ。

疲労感が日に日に増し、体力的に、無理の効かない体になっていくことを痛感した。

土日祝の仕事は、ただ座って、来客を待つという楽な仕事だし、ロダンにとってAAミーティングは、命を支える唯一のプログラムであることには、間違いない。確信している。

この不動産会社の仕事を始めて一六ヶ月になる。その間、AAのフェローシップ、ステップセミナー、等、大勢の仲間の集まる行事には参加できなかった。

ロダンは、松沢病院入院中から、土日のAA行事には欠かさず参加していた。初めのころは、全く、誰れ一人知る仲間もなく、いつも一人で、ポツンと参加していた。AAミーティングの参加を続けるうち、一人、また一人と仲間と知り合うようになって、いつしか、多くの仲間とコミュニケーションを取れることができるようになっていた。

最近では、各グループのミーティングだけでは、不足を感じ始めてきていた。

そして、ロダンは決断した。

一一月九日、田園調布一丁目の現場で仕事をしていた時、この日で、この不動産の仕事を最後にすることを決めた。

一十一月一〇日、三鷹にあるグループのミーティングで、仲間の一人に、

「土日祝の仕事を辞めようと思っている。」

旨、話をしていく。

一十一月一日、不動産会社に電話をした。

「平日の仕事の関係で、土日がふさがって勤務ができない。勤

務できる状態になったらまた使って下さい。」と、お願いして、了解を得る事ができた。ウソも方便だ。

その結果、月々木は仕事、金日は休日となった。

サブナードの会社には、祝日には、関係なく、月々木に仕事をさせていただく事を交渉して、了承していただいた。

AAの仲間に、土日祝の仕事を辞めた旨話すと、ほとんどの仲間は賛成してくれた。

一月二日、夜のミーティング会場に一八時に到着した。

まだ若い会場チェアマンが一人いて、完璧なまでに仲間を迎い入れる準備がしてあった。

暖かいコーヒーを飲みながら、最近、仲間から紹介していた本『ビルはこう思う』を、読んでいた。

会場チェアマンがロダンの背中にある黒板にフェローシップの予定を書き始めた。

一月三日、高尾山登山、集合時間……等。

ロダンはこの行事に参加したいと思った。

「高尾山登山にロダンも参加させて下さい。」と、いつていた。

「え!!、ええ。ぜひ、参加して下さい。」

と、返答され、ロダンは思った。土日の仕事がなくなったから、色々な可能性が増えてきた。金土日は、いつでも、どんな予定も組めるのだ。急に心が豊かになってきた。

ワーカーホリックでもあるロダンは、いつしか仕事に縛られていたのだ。そして、生活保護からの経済的自立にこだわっていた。いや、こだわり過ぎていたのだと思った。

囲碁にしても、都の大会にどんどん参戦できるのだ。

一月三日は、どうも雨のようで、高尾山登山は中止になるかも知れない。今日(一月二九日)は、一時三〇分に部屋を出て、清瀬地区市民講座「アルコール依存症」ってなに?に行かせていただくことにしている。プログラムの主催の項に、救世軍自省館が名を連ねている。

夜のミーティングは三〇日の高尾山登山の主催グループが予定している。

天気予報通りに、朝から雨が降っている。高尾山登山は中止になるかも知れない。

しかし、いいのだ。豊かな心を取り戻すことができた。癌という病気がそれを教えてくれたのだ。

今日一日、アルコール依存症の、癌患者のロダンは生かされている。

平成一五年一月二九日AM一一時記

白百合の花に時々水をやり

その時々はいつもドキドキ

ロダン

水道町より

「そんじゃ、帰るわ」と去ってゆくおじさん。ただそれだけの事になったけど、それは今までのにならな別れ方だなあ」と思っていた。

新潟市内で野宿する人の数は五〇人くらい。目も多くなっているのが新潟駅の連絡通路で、それ以外の人たちは松林、橋の下、街なか、に工夫をこらして暮らしている。

昼間は公共施設のロビー、駅の待ち合い室、ダイエーなどでよく見かける。

今冬、新潟市がようやく腰を上げ、冬場の緊急避難所を確保する為の費用二〇〇万円を用意すると発表した。

支援団体二つに物件手配、管理などをまかせるが家賃、火熱費は出す、という内容。冬場四ヶ月間の避難所だ。

十二月二日から約三十人の希望者が、市内四ヶ所に分かれてくらし始めた。「去年の正月はひどかったが、今年は吹雪がきこも

部屋の中ですよ」夜、戻っている自分の場所がある。「そのことが皆の表情をガラリと変えている。やさしい言葉や冗談が増えた。

「安心して帰れる場所」の存在は人にと、何と大事なものが実感する日々である。「そんじゃ、帰るわ」と去ってゆくおじさん。おしゃべりも一段落して、私に別れを告げて歩きだした。「帰るわ」という言葉のうれしい響きが私の頭の中で何度もくり返される。



あか い 花

はり師いが丸

その晩、私はひどく陰鬱だった。「自分は無価値だ」という想いに襲われていた。そうした自意識は理屈からは生まれない。些細なことでとりつかれるものだ。卑屈な感情はうとましく、ましてや他人と比較するものではないが、涙で洗い流すこともできないそれは、どうすれば溶けてくれるのか。「明日になれば大丈夫だよ」連れが適切な見解を示してくれる。こんな時は眠るしかない。

翌日、画鋸を踏んで自転車がパンクした。自転車で画鋸を踏んだのは三度目だった。この屈辱感、たとえていうなら、犬の糞を踏んだ瞬間に近い。公道に画鋸を落とした人間に怒りが沸騰するが、画鋸の刺さったズブズブのタイヤは、そのときの私にはあまりにも似つかわしく、画鋸が私を選んだとさえ思え、「一晚寝てもこれかよ」と笑うしかなかった。

1キロほど自転車を引きずって、いつもの自転車屋さんに向かう。

いが丸の自転車はボロである。連れと二人乗りすることが多い上、坂の多い町で暮らしているので消耗が甚だしい。チェーンが緩むたび、タイヤがパンクするたび、同じ店で面倒をみていただいているが、雨ざらしの、自ら手入れを施していない自転車を差し出すのはいつも恥ずかしい。ボロいのが恥なのではない。愛情をかけてないことが恥なのだ。余計な愛想を持ち合わせない店主は、それを見抜いているにちがいないと思うと尚更である。

ところがこの日、店に出てきたのは半分金髪の若いお兄ちゃんだった。訝りつつも、胸の奥には興味の火がともる。

「お預かりします」と言っても動かない私を、「お待ちになりますか?」と軽く確認し、彼は作業にとりかかった。そっと一步下がり、目に品をつくらないように用心しながら、視線を彼の手に向けた。

私は修理をしている男の手が好きだ。ボルトを押さえる指。レンチを握る手。ナットを持つ指。軸を生み、一定の線や弧を描きながら、度を越すことも、不足することなく動く手はなまめかしい。人は裏切るが、手は嘘をつかない。饒舌な男の口など、見ようとも思わないが、年月を重ね、厚みを増した職人の手には、見惚れながらも慎みを覚える。

途中、店の奥から出てきた主と彼の顔があまりにも似ていたので、吹き出しそうになったが、そっくりの息子が、男親の店で仕事をするようになるまでには、父子の確執が少なからず存在しただろうと推測する。熟練とはいえないけれども、若い手は今、道具の法則に従いながら、過不足なく動き続けている。

恥ずかしいことに三ヶ所も発見されたタイヤの穴は全て塞がれ、私の立ち去る時間がやってきた。修理代をちょうど持ち合わせていたが、あと数秒長居するために、釣り銭が出るようにお金を渡した。

自転車は軽快に動き出す。私はまだ、人が好きなのかもしれないと思う。この日、画鋸は私を選んだのだろう。

山谷の天使

山谷には山谷の天使がいる、
でも、天使は毎日に
實際のことは、わかっている
山谷の現実がわかっている
でもこれだけいっているのか
知れない。たにも知れないほど
身せ？！ 体験が出来ない
不齊？ 地獄の天使より

俳句

いわせ まこと

はれ足にコハゼのかぶれ夏の果

秋寒や買ったたかわしわが手あし

酒の市しごとすれよとタビを買う

股ぐらで（豆たん）アンカをこくや師冬寒

次号29号は3月1日発行予定です。

投稿者の皆さん、原稿締めきりは
2月3日必着にてお願いします！

露宿ペン倶楽部短信

投稿者各位殿、あけましておめでとう
ございます。

昨年も「露宿」は皆さまのお陰を
もちまして休むことなく定期発行を
続けられました。「まだ発行してん
の！」との陰口は山の如く。読まず
に捨てられる事日常茶飯事。けれど、
時流に流されず、自由なる底辺から
の表現を守りつづける「露宿」は
「知る人ぞ知る」貴重な雑誌になっ
ております。路上の問題を路上が語
る。これに形式があるう筈がありま
せん。今年もダイヤモンドの原石が
転がる路上から、言葉、表現を武器
に社会に立ち向かっていきたいと存
じます。

「露宿」30号まで、あと2号。5
年目の「露宿」へ熱き表現を！

編集後記

「炬燵とみかんと寝正月

そんな暮らしもついぞ忘れて」

あれえ！いつもと違うぞ？そう、今号は(お)
氏編集者の都合が悪く主宰自ら編集作業を徹夜
で敢行。いつも他人にまかせてばかりいたもの
で、編集の苦勞をしみじみと実感をしておりま
す。そんなこんなで新しい年。今年はどうな年
にしたいですか？小生は何ごともなく過ぎ去る
普通の年で充分でございます。(か)

Rojuku

定期購読大募集

購読費・スポンサー費

送り先

郵便振替口座

00160-6-190947

「ろじゅく編集室」

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供する為、つくられました。一冊でも多く雑誌を印刷し、路上生活者の方に手渡したい思いと、利益が出れば炊き出しのお米代にしたい為、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

「ろじゅく」

〔露宿定期購読の御案内〕

毎号確実に読者のお手元に届けるために当方では定期購読を承っております。

定期購読8回分 5000円（郵送費込み）

定期購読4回分 2500円（郵送費込み）

一回ごとの購入でも大歓迎。

一冊は送料込みで660円となります。

申し込み方法

郵便振替用紙（00160-6-190947ろじゅく編集室）に定期購読もしくは継続購読とお書きになり、住所、氏名を明記の上送金して下さい（発行ごとに郵送します）。尚、郵便振替の他、切手での受け付けもしております。FAX、メールにても注文承り中。

まとめ買いはお安くなります。

2冊以上は送料無料、5冊2000円、10冊3500円、50冊15000円（いずれも送料込み）となります。

路上文芸総合雑誌「露宿（ROJUKU）」第28号 2004年1月1日発行（隔月刊）

主宰・笠井和明 編集/発行・ろじゅく編集室 〒160-0023 東京都新宿区西新宿4-32-4-603

TEL/FAX 03-3373-9878/090-3818-3450（笠井）

Eメール・rojuku@d9.dion.ne.jp URL・http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/

郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」

販売協力・新宿連絡会、露宿ペン倶楽部 印刷・株式会社ラジオグラフィー

定価500円